

しめのひとこと

志免町のいろんなひと、いろんなこと

1

「昼読書」
始めました!
読み聞かせの今

よしがえ

ちえこ

吉谷 千枝子

おはなし会「ねっこぼっこ」代表

25年間、保育士として勤め退職。ボランティアを始めようと考えていた時に、おはなし会「ねっこぼっこ」に出会う。以来17年間、志免町の子どもの笑顔のために、精力的に活動を続けています。



参加のきっかけと現在のメンバー

社会に何か貢献したい、ボランティア活動を始めたいと考えていました。保育士として、子どもたちに関わってきましたから、その頃は「子ども」とは違う、別の分野のボランティア活動も考えていました。

たまたま立ち寄った図書館で、図書館ボランティアとして読み聞かせの活動をされていたおはなし会「ねっこぼっこ」に出会い、メンバーの中に近所の方がいて、誘ってもらったこともあって、活動に参加するようになりました。それ以来17年続けています。

現在のメンバーは、40～70代の13名です。子どもが大好きで、ボランティア精神旺盛な方ばかりです。図書館主催の「読み聞かせボランティア養成講座」を通じてメンバーになった方や、町内各小学校にある読み聞かせの会から、自分の子どもの卒業後にねっこぼっこの活動に参加して下さる方もいます。

未就学児向けには、読み聞かせと工作を両方用意していますが、工作を専門に担当してくれる方がいるおかげで、以前より読み聞かせに集中できる環境になりました。

読み聞かせの活動を実際に見て、「楽しそうね」と思うところをきっかけにして、もう少しメンバーが増えるといいなと思っています。



ねっこぼっこの始まりと由来

昭和57年に、何組かの親子が発起人となって、自分の子どもに読み聞かせたり、親子で本を読む「親子読書会」の活動を始めたそうです。

そのうち、地域の子どもたちを対象にして、読み聞かせの活動を広げていったのが始まりと聞いています。

名前の由来は、「ねっこぼっこ」という絵本からです。ねっこの子ども（ぼっこ）が、花や虫や鳥の子どもになり大地のお母さんに見送られて、花になったり鳥になったりする絵本です。冬になるとみんな、お母さんの元へ戻るんです。子どもたちをやさしく包み込むような、大地のお母さんの気持ちで活動しています。



志免町での活動について

コロナの影響がない昨年度は、健康課の0歳児向け健診と、しめキッズにそれぞれ年2回、子育て支援課のブックスタート、町内の町立保育園2園に年1回、小学校には、全学年全クラス2回ずつ読み聞かせをしていました。また、中学校は朝読書の時間に全クラス2回の訪問と、そのほかにも頼まれたらスケジュール調整をして活動しています。団体の高齢化に伴い、活動を少し整理しようという話も出ていましたが、事業が少し減り、新しいメンバーが増えたこともあって、活動を継続できています。



コロナ禍での活動について

今回のコロナ禍で、読み聞かせもおはなし会も中止になっています。どうにかして活動の機会を持ちたいと考えていましたが、なかなか難しいです。

小学生の孫から「給食の時間が食べるだけでつまらん。友だちと話ができないから。」と聞いて、「給食の時間に読み聞かせる昼読書はどうか」と思いつきました。図書館の職員に相談し、町内の小学校に呼びかけてもらおうと、まず2つの小学校で「昼読書」の活動が始まりました。以前のようにクラスに入って読み聞かせをする活動は、私たちも高齢者が多いので、まだまだ不安があります。

この一年は、小学生向けの「昼読書」を主な活動として取り組もうと思います。

「昼読書」では、声だけ、言葉だけで1年から6年の子どもが理解できるお話を選ぶことが大事です。

楽しく給食を食べてほしいと思い、楽しかった、面白かったという内容で終わる話、興味を持ってくれる新しい話を選んで実施しています。

周りの自治体では、小学校で読み聞かせを再開したところもあると聞いていますが、3密を避ける為、回数を増やして対応しているようです。志免町は子どもが多く、同じやり方はできないでしょう。

読み聞かせは再開したいし、学校も待っていると感じますが、私たちも団体として、不安なく継続して活動できる方法を模索しなくてはと思っています。

毎年読書集会をしている小学校から、リモートで全クラスにテレビ配信する形で、本を読んだり、紹介をしてみませんかと提案がありました。

今から本の準備に入り、10月末に実施する予定です。



昔と比べて、 子どもたちの変化を感じますか？

今の思春期の子どもたちは深い悩みを持っているけれど、自分の気持ちを言葉で伝えることができていないと感じます。また、相手の言葉を感じ取れない、理解できない子がすごく増えているのではないかと、このままでは、ますます言葉を知らない、文字で伝えられない子が増えてくるのではと懸念しています。

私の一生の課題だなと思っていますが、日々の読み聞かせ活動の中で、しっかり自分の人間としての言葉で相手に伝えること、話している人の気持ちや感情が、顔を見ながら伝えたら伝わるよと、言葉の大切さ、本の面白さを伝えていきたい。

長年活動していると社会人になった志免町の読み聞かせで育った子どもたちが「ねっこぼっこさんですか」と町で声をかけてくれます。子どもたちが、読み聞かせで伝えた本や言葉で育ち、社会の中で貢献している姿を見ると、「なんと素晴らしいボランティアなんだろう」と思います。活動は頑張っていますが、子どもたちの心にどれだけ伝わっているだろうかと、不安になることもあります。大人になっても覚えていて、声をかけてくれるのは、「誰かのところに、ちゃんと響いてる」ことが実感できる瞬間でもあり、この活動の醍醐味でもあります。

言葉がちゃんと心に届いている。そんな体験をこれからもメンバーと一緒に重ねていきたいですね。



取材を終えて

おはなし会「ねっこぼっこ」活動から、子どもたちは、小さなころから楽しく本に親しみ、豊かな言葉に触れる時間や機会をたくさん持つことが大切だと感じました。また、長く活動を続ける団体が、活動の醍醐味を感じ、新たなモチベーションにしていることが分かりました。これからの活動も応援しています。

